

## 医学部看護学科4年生がフィリピン共和国で看護学研修を実施

2017年9月4日から9月8日、医学部看護学科4年生4名が、フィリピン共和国において看護学研修を行いました。

実習場所：フィリピン共和国 サントトマス大学 (UST)、サンラザロ病院

- 1日目：サントトマス大学のキャンパスツアー、看護技術の授業の参加
- 2日目：サントトマス大学病院で看護学生に同行実習
- 3日目：マニラシティツアー、熱帯感染症の講義
- 4、5日目：サンラザロ病院での実習

<街の様子から学んだこと>

・フィリピンでは自動車が多く、渋滞が頻繁に見られた。また、道路も日本のように整備されているとはいいがたく、車線変更が多いだけでなく、自動車が走っている傍を歩いたり、横切る通行人が多かった。このような状況は、交通事故に繋がるのではないかと考えた。

・交通状況に関しては、排気ガスも印象に残った。フィリピンでは、死因の1つに慢性肺疾患があり、このような排気ガスを毎日吸い込むことが大きく影響しているのではないかと考えた。実際にフィリピンの街を歩くことで、インフラの現状とそこから考えられる健康問題をつなげて考えることができた。

・フィリピンでは破傷風やレプトスピラ症などの感染症が多い。サンダルや裸足で歩いている人々を多く見かけた。このような状況により、足を傷つける機会が増え、創傷だけではなく、そこから感染してしまうこともあるのではと考えた。

以上のことから、健康は、環境や文化が大きく影響しているため、そこに着目することが重要であると考えた。

<UST ホスピタルで学んだこと>

・USTでは「祈る」ということもスピリチュアルケアとして行われていることを知った。仮にカトリック教徒でなくてもフィリピンの人々が大切にしている信仰を認め、そこに寄り添うことが重要であると考えた。こういったことから、その国の宗教や歴史、また言語など、その国の人々が大切にしている文化を知り、大切にしながら看護ケアを行っていくことが必要であると思った。

・USTでは看護師が薬の形状を変えたり、経鼻栄養も手動で行っていた。十分な道具や器具をそろえるのが難しい状況だからこそ、このように身近な物品で対応していたと考えられる。これは日本と違う状況であるが、この違いが起る原因を考えていくことで、その国の状況や背景が見えてくると思った。

以上のことから、自国の看護が当たり前だと思うのではなく、その国独自の看護に目を向けることが必要であると考えた。

<サンラザロ病院で学んだこと>

・オレイエス指導者から、熱帯感染症についての講義を受けた。その講義の中で、媒介動物が繁殖する季節には、一定の感染症が増加することや、フィリピンでは野生動物に触れる機会が多く、予防接種も十分ではないため、日本では滅多に見られない感染症が多いと学んだ。

・サンラザロ病院に行くと、様々な感染症で入院している患者さんを見た。実際に、雨季に多いデング熱の患者や、動物に噛まれた後に予防接種に来ている患者を多く見かけた。

以上のことから、疾病の発生原因として、インフラ、気候、土地、制度が関係していると考えた。

<この研修で学んだ国際看護に必要な視点>

- 1.健康は環境や文化が大きく影響しているため、そこに注目することが大切
- 2.看護の中に文化や経済が表れているため、その国の看護に目を向ける
- 3.疾病の発生原因として、インフラ、気候、土地、制度が関係している

現在、世界では平均寿命に大きく差がでており、これは健康格差にも大きな差があることを反映しています。また、現在経済のグローバル化、国際間の移動手段の発達により、人々の活動は国際的になってきていますが、同時に他国の疾病も国境を越えて移動する可能性が高くなってきているといえます。そして、グローバル化が進んだ世の中であるからこそ、他国の人が自国とは違う保健医療を受ける機会も増加することが予測できます。

この研修で学んだことは、異国の地で看護を行う時だけではなく日本で看護を行う際にも重要であると考えます。

煙草の有害性に関するポスター



皮内注射の実施



集合写真

